

浄土

1981-10

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特許庁）認可
昭和五十六年九月二十五日印刷
第四十七卷 第十号



1981

— 秋 —

三耕西大



—中国の卓球関係者と歓談する筆者—

合理的精神に学ぶ

—中国のスポーツ精神—

本年夏、八月七日より十七日迄、関東学生卓球連盟の女子選抜軍の団長として中国に行ってまいりました。中国では、河北省の首都石家庄というところで、中国の選手と一緒に練習させて貰いました。この河北省の女子チームは、上海について中国第二位の大変強力なチームで、この中には、世界選手権の中国の代表選手になるような選手が二人も加っており、また大変よいコーチがいるチームです。毎日の練習は、午前三時間、午後三時間の六時間です。この三時間の間に休憩は十分間あります。小生がまず第一に感心したのは、とても激しい練習でも中国の選手はあまり汗をかかないのです。聞いてみますと、訓練努力して、そのような体質にするそうです。すなわちあまり水分をとらないで、体質をアルカリ性にするそうで、疲労の回復も早いそうです。ですから、一日に一回しかユニホームを着替えません。

もう一つは、練習場の照明等、十分間の休み時間でも、すぐスイッチをきります。大変節電しており、このことは徹底しています。反面練習時間中、ボール等はふんだんにつかい、選手を休ませないようにしており、すべてにわたって合理的であり、むだははぶいています。大変技術的にも、精神的にも学ぶところの多い十日間でした。

(佐藤行信)

|| 十月号 ||



第九の真身観は、これ観仏三昧の法なり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.174)

目 次

法 話

十夜法要……………村上博了……(2)

(す)(い)(そ)(う)「つくづく」法師抄①

阿弥陀仏に染むる心……………真野孝信……(6)

甲子園余録 精神力が栄光を呼んだ……………菊地謙雄……(10)

一心の教育の場が少ない一

ニシルクロードの旅ニ

砂漠の風物と敦煌<I>……………山野井貫秀……(21)

—「莫高窟」管見—

詩・・・秋の断想……………清川宗治……(15)

法然上人の仏教観……………津村諦堂……(32)

<童話シリーズ>

まんまるお月さまをみた……………布村哲哉……(16)

浄土句集……………一田牛猷選……(28)

<表紙のことば>秋……………大西耕三……(30)

<表紙裏・巻頭言> 合理的精神に学ぶ……………佐藤行信

念仏ひじり三国志⑨——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部



十夜法要

むら かし かく りょう
村 上 博 了

(茨城教区教化団長
茨城県境町専修寺住職)

一

昔からお米と雑穀、野菜、品々の果実類収穫の楽しい旧十月（現在十、十一月）を、お十夜月と云う。ここに十夜の季節を迎え、空高く、大気は特に清澄、地上には黄金色の稲の穂波が美しく、山野の紅

葉また天地を飾り、梵鐘声と祭りばやしの音色が、各地に冴えわたる、さわやかな時節となった。
十夜とは十日十夜法要の略称であり、俗にお米まつり、野菜まつり、各種のくだもの祭りとも呼ばれる。嬉しい収穫の感謝祭であり、明年もまた豊年万作であらんことを阿弥陀如来さまに請い願う。人間の性の尊い「おかげさま」の表現であり、生まれなが

ら持っている仏性を育てる行事である。各寺院が協力し、法要が盛大徹底すべく、日時を分かちあい、相互に随喜して盛会をはかり、民意に答える行事である。

十夜法要は、旧十月六日から十五日成満までの十日間修行されていた、わが浄土宗の勸会の大法要でもある。

本堂を清掃し、本尊阿弥陀如来の宝前に、赤ろうそくを立て、如法の香花灯明霊膳、大御重を各種野菜果実類を山盛りに供養する。

法要には礼讃、引声阿弥陀経、引声念仏、双盤、鉦を用いためでたい音楽法要で、大衆もまた念仏を同唱し、時に高くまた低く唱和し、誰も気軽に同調でき、きく人もまた音階を有難くうけとめ、自然と善心が生じ、尊い仏性を育て、よい人生を作る伝灯の別時念仏会である。

寺院では珍らしい「めでたい」法要で、如来さまに感謝と後世菩提と、ご先祖代々、新亡精霊追善ができる無双の有難い大法要である。

一一

古人の句に、

極楽は いつも月夜の 十夜かな

と云う有名な句がある。

秋はその年で、よろず収納の大切な秋（とき）である。思えば、早春苗代をかき稲の苗を田に移植し、水をかけたり、施肥したり、草を取ったりして、我が子のように育成し、今や収穫のときを迎う。

若しも先般台風十五号のような集中豪雨禍または梅雨期までの多雨冷害、天候不順であれば、一年の苦勞もまた水の泡となる。浄土三部経の一つ、『無量寿経』は、大経または双巻経とも愛称される有難いお経である。その中で、如来さまは、

天下和順 日月清明 云云

と誓願し、毎年天候が五風十雨で、めでたい収穫を守り下さるみ教えがある。月夜であれば、翌日は晴天となり、めでたく無事に収納が出来て、それこそ極楽である。

十夜法要につき蕪村は、

あなだぶと 茶もだぶだぶと 十夜哉

と、お十夜法要を表現する。

あなとは感嘆詞で、ああとという意味、だぶとは南無阿弥陀仏の下句、だぶつのつの文字をのみこんで、単に「だぶ」という南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と唱和する音声であって、あなだぶとは、ああ有難いナムアマダ仏ということである。

各寺の十夜法要念仏の合間にいただくお茶も、収穫の時だけに、茶碗の底に、少しうすいのをいただくのでなく、呑みたいだけ、だぶだぶといただくことを指している。また茶まで念仏の功德で、「だぶだぶ」と同化する有難いお十夜法要かなという訳である。収穫も豊作、誰の心もなごんで、大らかで、仏

性、親切さが一杯であかるい明日が期待される。

三

お互いに社会生活は、生業（なりわい）に忙しく、如来さまの大慈大悲や、また先祖さまの御供養もとかく忘れ勝ちとなる。まして生れながらの仏性も曇り勝ちである。

めでたい収穫に当り、おいしい主食の有難い新米等を手にとり、先ず如来さまご先祖さまに供養し、おかげさまと有難ういただくことは、真の幸福である。

そうして、如来の本願念仏を、心ゆくまで唱え、ご先祖さまの追善と各人自身の後世菩提の功德をつみ、心のつかれを打ち払い、人間と生れた喜びを感謝する。お念仏は唱えつづけると不思議と心が「さわやか」となり、力が全身に湧き上る。やるぞと生業に意欲がでる、有難いことではないか。

十夜法要は、大経、つまり『無量寿経』、鼓音（くをん）声経等に説かれている。我が宗では助会の法

要であり、宗定の大切な法要で浄土宗全寺院で修行される。そうして、忘れがちの仏性にあかりを点じて、人間としての真の喜びを味い、如来さまに感謝の「まこと」を捧げ、明年もまた無事息災で農作が豊年万作であらんことを願うことは、本当に有難い人生の冥利である。

新米の喜びを見ないで亡くなった方々には、十夜法要は特に誦誦（ふじ）文回向を捧げ、新米を手厚く供養し、俱会一処の冥祐を共に味い合う。年回なり、水子回向、忌日回向にまた先祖代々追善には、お塔婆供養も大切な十夜法要勝縁の利益功德である。

人生は無常で明日も期しがたいことが普通であって、明日なり明後日のことを考えると大変に淋しい。しかし淋しいからといって、なにもしないで、ふさぎこむ訳にも行かない。人生は、毎日が尊い実在である。『山家学生式』条項に、「一隅を照らす生活をつみ重ねよう」とある。生のある限り、少しなり共、世のため人のために役立ちたいと心がける生活が大切であり、やればなにかができる。

まず暖かい心を持ち親切にする。またいつも念仏

を唱える。お念仏は不思議なもので小さい声で申している、いつか心が「さわやか」になる。

如来さまの大慈大悲が現われて我らといつも共にあるからである。

如来さまと共にあれば心がつねに平穩（おだやか）であり、良いことをしなくてはいられない。親孝行せずにはいられない。子供達のよい友とならざるを得ない。

いざ十夜法要を迎え、お念仏を唱え、一家団らんの花を咲かせ、幸福生活を迎えたい。

南無阿弥陀仏

『浄土』誌の購読希望者のご紹介を、広くお願い申し上げます。昭和五十六年四月より、年会費誌代を三〇〇〇円に値上げいたしました。が、お見限りになることなく、どうぞ末永く宜しくお願い申し上げます。

法然上人讃仰会

(す)(い)(そ)(う)

「つくづく」法師抄(一)

—阿弥陀仏に染むる心—

何時の間にか、裏山の雑木林は色づきはじめた。その中でも、一際人目をひく柿の実が、有田の陶工を魅入らせたといわれる色づきで、秋を告げる昨今の風情ではある。

京阪の中間に位置するこの辺も、急速な開発の波におし流されるように、大自然の恩沢が、景観の変貌と共に失われてゆくのは、極めて淋しいことである。復元のない推移と喪失を、「近代化」の三文字で片付けられ、四季のめぐりに応じて、時の訪れを告げた肥沃の田畑も、減反と宅地化によって、黄金の波うちも、近在において



まの
真野 孝 信
こう しん

(八幡市正法寺住職)

は、恰も何かの遺跡を想わせる程に少くなつてゆく。所謂「都市化」である。

私は今、徒らに感傷に耽けようとしていたのではない。今生きる人間、この私の生きざまを熟慮したのである。秋の夜長を天与の時として、つたなく、而もはかないこの現し身を、自省するためにこそ頂きたい。

つぶさには知る由もなし虫の音に

尊き生命^{いのち}しらする吾

私は、総本山知恩院の成人式に出席して、レセプションでの乾杯の音頭を取るようにご指名を受けたので、そ

の適否を考える間もなく檀上に立つて、

「ご両親を最もお身近かに、数えきれぬ悠久のご先祖のみ命をおあずかりになり、更に良縁を結んで、見届けの出来ぬ、久遠の子孫にまでお伝えになる尊いみ命を宿されている皆さんの、今日のこの立派なご成人を、心からお祝い申し上げます。

私は、古い歌を借りて乾杯の序弁とさせていただきますことをご容赦願います。

人 多き人の中にも人ぞなし

人、人となれ人

——(再詠)——

乾杯！」

と絶叫して降壇した。この蕪辞は人の子の親として、私の口について発した真情であり、歓喜であり、願いでもあった。

全国から参加された満堂の新成人を、じっとみつめるうちに、ご両親の健否、また何所からといったことはもとより、ご本人のお名前すら存せぬ私の胸に、何ものにもまして尊い生命の実像を覚えたのであった。

この潑刺とした若人の、ただ一度きり、与えられて生

きてゆかれる人の世の長い旅路の営為に、他者との競い合いではなく、その人、その人の成敗得失を踏み越える中での生き甲斐を、心から念ずることのできた一日であった。

最近、「熟年」の用語が目にとまるようになった。寿命の延び、高齢化社会等から、壮年と老年の間に設定された用語かと想われるが、円熟期の年齢を意味するものであろうか。「熟」はもともと、ものを煮てやわらかくすることであらうし、「じゅくする」「うれる」「十分に」「なれる」「つらつら」を意味する熟語からもそのように受けとれるのである。「熟年」と熟字することの可否はともかく温か味のある用語である。そこには所謂キャリア即ち経歴とか経験が裏打ちされている。

壮年期を過ぎる頃から、身心共に老化することが覚られる反面に、これまでは気付かなかった人間性の生地(素地)が浮き出しはじめてくる。そこには、幾歳月を経た度世の旅の足跡が印されている。それは、恰もかれた手になる絵草紙のように、その一葉一葉の滲みに、その人、その人の味が秘められている。「醗(こく)」とでもいえばよいのであろうか。

幾歳月をかけた長途の旅路には、山あり谷あり、また平坦路あり、高低浅深、砂岩礫土、緩急難易をはじめ、春夏秋冬、寒暑涼暖、晴雨霰雪の他にも、健、病、傷等々の苦業を縁として、その人を味づけし、また味のわかる人にこうしてお育てをいただいたのである。まことに吾が力ならぬ縁力を弥陀の光益と気付かせていただけることは有難い。

たちならぶ仏の顔を今見れば

みな苦しみに耐へし姿

の歌を詠んだ歌人も、おそらくは熟年の感得であらう。

「人生最初の四〇年は、私たちにテキストをあたえてくれる。それからの三〇年はテキストについての註釈をあたえる」とのショーペンハウエル（一七八一—一八六〇）の言葉もまた、熟年にしてはじめて言える味のある格言である。

私は、信仰の人生経験に比例して深みを増すものである、と思う。いうまでもなく、信仰は学問ではないからである。然し、如何なる道も極まれば、そこに開かれる扉の内に、信仰の柱と苗床が用意されている。ただ、播種のときの到来を待つのみである。

先般、高祖（善導大師）を慕って、善導大師一三〇〇年遠忌奉讀の、浄土宗祖蹟参拝議員団の一員として訪中の折、尊敬する趙樸初先生からいただいた御染筆の中には、『水鳥樹林皆說法』と。また、尊敬する通一法師の御染筆の中には、『七宝行樹出微妙音』と。ともに仏陀の経説と雖も、特にこの仏意を汲んでこの語を選び、私に御恵与下さったことに感謝するものである。

私は、短歌や俳句についての約束ことや定型も存ぜぬままに、自己流の便宜から、その音律のみを利用して、書き尽きぬおもいを、語字を少なく表現する習慣がついてしまったのであるが、紙片に、

あなとうと音なきみ声わが胸に

覚らせ給うみ仏の慈悲

と誌したのは、本年の御題「音」に想いを寄せた仏前での悦びであり、南無阿弥陀仏と称えて拜む度毎の仏のみ声は、私へのお諭しであって、悔むことの多い私の生きざまが恥しい。その一面に、私を訓し教えて下さった恩師も、私を育てて下さった父母も、既に西往の友も縁者も、お先達がうち揃って還来同座して下さることが最もうれしい。

十数年前の私は、元祖法然上人の御法語の、

「衆生、ホトケヲ礼スレバ、仏、コレヲ見タマフ。衆

生、ホトケヲ、トナフレバ、仏、コレヲキキ給フ。衆

生、仏ヲ念ズレバ、仏モ、衆生ヲ念ジタマフ。（後略）

を、善導大師の三縁（親縁・近縁・増上縁）の親縁（仏モ衆生

モ、親子ノ如クナル故ニの名づけ）を釈し給うた御教示とし

て、拜読、拜誦の繰返しと、字句の解釈や説明に終始す

る程度にすぎなかった。

けれども、恩師増上寺椎尾弁匡大僧正の、

何事も念仏を申すれば

そこに願成の弥陀も補処清衆

も法然上人も信じて申した祖先

もゐますことを還相と承り念々

往還一如とわからせて頂きました

の御染筆に接して、繰返し三度読ませていただいた。三

返目の「……わからせて頂きました」の瞬間、頭上に、

鉄槌を下されたように全身に震いを覚えた。そのとき、

「知っている」がほんとうにわかっていないこと。（椎尾

先生が御生前に、常におおせになったことだが）。——更に、

「称うれば」「申すれば」（浄土宗の起行中の肝腎要であ

る正定の業たる称名正行）の体解実践の乏しさを。——三

つには、「三返」することの大切さ（同語同句を三唱し

たり、同事を三問三答すること等）を、『つくづく』感じと

らせていただいたのである。然し、「未だ、未だ、未だ、

の私」が、臨終にまで及ぶのである。

求道の道程は遙かにして、而も険しい。遙かなるが故

に尊く、険しさの故に楽しいのである。足の運びは鈍く

とも、休まず弛まず歩きつづけた。そして、一步一步

を篤と踏しめたい。どの一歩も、二度ない大切な一歩だ

からである。

元祖大師法然上人のみ口の開かせ給うところ、常に、

西方浄土か阿弥陀仏かお念仏のことであつたと承る。

今季に臨んで、私は、私ながらの機で、元祖大師の、

阿弥陀仏にそむる心の色に出は

秋のこずえのたぐひならまし

とのおうたを通して、夜長の一時、

——阿弥陀に染むる心——

の有難い御説法を拝聴させていただくことにする。

南無阿弥陀仏

——「つくづく」法師

甲子園
余録

精神力が栄光を呼んだ

—心の教育の場が少ない—



菊^{きく}地^ち謙^{けん}雄^{ゆう}

(横須賀市正行院住職)

大正十五年といえば半世紀も前のことではあるが、未だに私の胸中に昨日のことのように、はっきり余影が残っている。それは第十二回全国中等学校優勝大会に旧制県立静岡中学が優勝した時のことではる。

近年浄土宗関係の上宮、東山、鎮西高校が優秀な成績を挙げて全国を湧かしている。当

時はテレビもラジオもなく街の要所要所に戦況揭示所が設けられ、また公園等広場にはブレイボードが掲げられて試合の運びを逐一報ぜられるので、いずこも黒山の群衆が街頭にあふれて全国を湧かしたものであった。

私は今ここに古いこの優勝の栄光を記そうとするのではない。当時世評もマスコミも静

岡が優勝するだろうとは思っていなかったし静岡のファンだって万一の優勝も期待していなかったのである。温暖な気候と豊富な海、山の幸に恵まれた土地に育つ者の特質(?)とも言えようか、温和で、はげしい進取の気性に欠けた忍耐力の少い静岡子が早実、前橋中、高松中、大連商を破って見事に優勝したのは、一体何がそうさせたのか、を考えて見たかった。

× × ×

大正十四年夏の大会に甲子園に出た六人の選手を卒業させた野球部は部員、僅かに六人という弱少というよりチーム編成にこと欠く始末であった。教師、先輩、後援会等の必死な人集めが始った。その中に私の名が挙げられ、人々の熱意と法類であり保証人であった静岡、報土寺戸崎潜竜師の強い勧めによって入部した。四年生の三学期のことである。倭

小な体軀と性来の小心は野球には適しない。きびしい特訓もコーチャーや先輩達の必死の訓練も空しくチームのウィークポイントとして自他共に認めていた。

「二塁へ球が飛ぶと、ひやっとする……」「あいつに打順が廻ると、もうあきらめる」等が当時のファンの真実の気持であった。それでも交替員のない野球部は、勵ましたり慰めたり喰の粉を飲ませたり育ててくれた。それが県下を勝ち抜き、神奈川戦抜の県立横浜第一中を第一回戦で十二対四、第二回戦で十九対一で破って神静代表となって甲子園の全国大会に出場することが出来た。何がそうさせたのであろうか。

× × ×

大正十五年八月十三日、白熱快晴の甲子園で第十二回大会の開会式が始った。数万人の観衆の拍手、空に乱舞する飛行機十三機、祝賀

花火のとどろき、音楽隊の行進曲に迎えられて第三番目にグラウンドに登る。ボーイスカートの団杖のアーチをくぐって行進する二十三チームの感激は如何ばかりであったろうか。

「脚が地についているか」「夢ではないか尻をつねってみろ」とささやきあった。みんな緊張の極に達していた。

然し、どうしたことか私には、それ程の緊張感もこちらにもならず、むしろ平常な気持ちで、あたりの状況を見ながら行進ができた。守備についても、バッターボックスに立っても心が落付けたし度胸が据った。

……これだけの観衆のしている晴れの場所で球にあたって死んだら本望だ……。

これが私の内心であった。猛ゴロにも敢然ととびつけたし、からだに迫る変化球にも身をさけないで凝視して打てた。気の弱い劣勢な私にどうしてそんな力が湧いてきたのであろうか。当時の野球評論家、飛田穂洲氏に「内野の整備、殊に二塁少年本多の出色的好

守に救われ……」の讃評を頂いて、全国ビックアップチームの二塁手に選ばれたのは不思議というより他はない。

後日静岡に帰りOBと歓迎試合を行った時の私は、昔の私に戻って敗因をつくってしまった。遂に弱小本多で学校を卒業したのである。

× × ×

精神力の偉大さを少年ながら深く感じた。当時の根井校長は記念誌に「選手が能く和協し……」と、また中村部長は「技より精神ということは親しく経験し体得したところ」と述べておられるのも、選手が合宿をして寝食を共にし、教師と先輩と共にコミュニケーションを通して親和した力がチームの力以上の力となって現れたのであろう。朝日新聞の大会評にも「出来の良し悪し、戦術の巧拙や体力の優劣を超越した意気と心の尊さ……」と力

説している。

×

×

×

仏教は和を以て貴しと説いている。人と人との和、人と万物との和、人と自然との和が如何に人生にとって大切であるかは自明のことであるにもかかわらず、今日は第二義的に扱われているように思われてならない。

家庭も社会も学校教育も知識優先の時代で他の子供より一点でも多く評価をとらないと、良いと称されている学校へ入学することが出来ない。優良校を卒業しないと優秀な会社へ入社することが出来ない。生涯下積み我的生活となる。だから親は子供の為にどんな犠牲を払っても試験問題を手に入れたくなる。そこには願共諸衆生の互助の気持ちは少しもない。

知識教育は徹底して、大学教育を受けない人の少ない今日、物の理屈のよくわかった人

ばかりの社会でありながら真に平和な、暮しよい世の中と言えるであろうか。

知識の所産である物質文化は向上した。便利な世の中で座っていて今、世界の一隅で起っている事柄を見ることが出来る。宇宙旅行も可能という。ありがたいことに違いない。洗濯機を使えば、どんなにたくさん汚れ物だって手を使わないでボタン一つで濯ぎから脱水まで仕上って干すだけの労力で終る。便利で真にありがたい。それが一昔前、私の母親は私の汚れ物を寒風吹き荒れる井戸端で、盥に水を汲み込んで洗濯板にひろげて石鹼をこすりつけて、ごしごしもみ洗いしてくれたものだ。そのヒビわれた、アカぎれだらけの母の手が今でも眼底に残っており、子供心に親の労苦をありがたく思うのであった。

精神教育の場合は真に少ない時代である。

×

×

×

お釈迦様は因縁生起と説いておられる。世の中のすべてのものはひとりだちでない。ということでは因をとりまく諸縁が、うまく和合しないと現象しないと教えられている。一粒の種もそれを取まく土、太陽、空気、水等すべての縁が正しく加わらない限り発芽しない。私の今日あるのも同じことで、因縁生起した先祖代々の生命を根源として、生を得てから無限の諸縁に育てられて今日あることを知らねばならない。

なまやさしい他力のお蔭ではない。自分の力で生産し自分の力で生きていると考えて、他を押し除き征服し、勝者として世の中を渡することはできない筈である。

このことわりは愚痴の私にはとうてい了解し得ることではないが、法然上人は称名念仏により阿弥陀如来の御本願の光明によって了解し得たと同様の世渡りが出来ると教えられている。即ち称名念仏によって往生する（正しい生活に更生する）ことができるのである。

比叡山での学修も、高野、奈良の研学も凡夫得脱の法を究めることにならなかった。「教うるに人もなく、示すに輩もなし、然る間、なげきなげき経蔵にいり、かなしみかなしみ聖教にむかひて手ずから、自らひらき見しに……」とて、善導大師の観經の疏の「一心専念弥陀名号」の御文に到達されたのである。

「智者のふるまいをせずして」とも遺憾なさって、ひたすら念仏を称えることを勧められている。ひたむきな信の生活である。

私は少年時代、野球を通して、然も非力な者が優勝という意外な成果を体験できた。数々の観衆の万雷の声援を全身に吸収することによって、無心の中に強い精神力を頂いて、それが大きな力となったことを追懐して、如何に「心」の問題が処世の上に肝要であるかを信じ、仏教信仰による以外に「知情一如」の人格形成は出来ないことを知り、敢てこの拙文をものした次第である。



秋の断想

清きよ川かわ宗そう治じ

想うことの余りにも多い

気を使い

心を配る

——そして体を動かし、走る

体で感じる

体で触れる

体でつかんだ記憶を、経験として高めて行く

記憶の籠の中につめ込んだ経験を

——今、ひとつひとつ想いめぐらす

秋は想いも新た

また、想いを深めて行く、時——

まんまるお月さまをみた

布^{ぬの}村^{むら}哲^{てつ}哉^や



お山の秋は とてもにぎやかです
どこからか 歌がきこえてきます

カキの実 クリの実 ひろいましょう
ハギのトンネル くぐります
ススキの中の かくれんぼ
だれかさんの耳が みえている

「うさぎのピョン吉みつけたぞ。」
といいながらかくれんぼの鬼になっていたさるのモン太
が、大きな声でいいますと、
「こんども、ピョン吉が、いちばん最初だ。」
とくまのゴロベエがいました。
「わあーい、またピョン吉が鬼よ。」
いっしょに、かくれんぼをしていたりすのチイコや、
ひつじのメイコがいます。

しかのツノ助もわらいながら、

「だめだなあ、ぼくみたいに、もっと早く走らなくちゃ。」

といいますと、モン太が、またいいます。

「そうなんだ、ビョン吉は、いつもびくびくしているよわ虫だからな。かくれるのもへたなんだ。さあ、こんどは、よわ虫ビョン吉の鬼だぞ。あっちへ行つて」だるまさんころんだよ」と十回かぞえな。」

みんなは「よわ虫ビョン吉の鬼だ鬼だ」とはやしなから、リンドウやオミナエシの花のあいだへ、かけこみました。

ビョン吉は、のそのそとハギの花の中へはいると目をつぶり、ゆっくり「だるまさんころんだよ」とかぞえます。

ビョン吉が鬼になると、みんなはゆっくりと、いちばんいい、かくれ場所をさがせますから、かくれてしまふとなかなかみつからないのです。

十回かぞえたビョン吉が、やっと目をあけて、あたりを見まわしました。

みんなは、よほど上手に、かくれたのでしょう。

ゴロベエの大きなからだも、チイコのかわいいしっぽも、メイコの白い毛も、ツノ助の長いつのも、それに、すばしっこいモン太のすがたなどは、もちろんどこにも見あたりません。

ススキの中をさがしました。

コスモスの中も、さがしました。

しかし、どこにも、だれも見つかりません。

「モン太くん、どこへかくれたんだよ。チイコちゃんも出てきておくれよ。」

ススキのホが、ここだよ、そこだよと手まねぎしているのですが、そこにもどこにも、だれもいません。

西の空は、もう夕やけです。

だんだん、ころほそくなったビョン吉がまた呼びました。

「おーい、ゴロベエーくん。メイコちゃん。ツノ助くん。」

だれの、へんじもありません。

きこえてくるのは、木の葉が、ビョン吉をどうやってつかまえるかと、話しかっている声だけです。

みんな、だまって家へかえってしまったのでしょう。

か。

それとも、まだ、どこかにかくれているのでしょうか。急に出てきて、おどろかそうとしているのではないのでしょうか。

もう、こわくて、あるけません。

暗さがまさしくと、大きな木や小さい木が、大きなおぼけになって、前や、うしろから、つかみかかっています。

「こわいよ。だれかきてー。エーン。」

いままで、がまんをしていたビヨン吉でしたが、ヤツデのはっぱに顔をなぜられてとうとう泣き出しました。

おおつぶの涙を、ぼろぼろと、ながしながら、ふと見ると、目の上にたまった涙が、光っているのです。

そこには――

きん色に、きらきらかがやくお月さま。

まんまるのお月さまが、うつっているではありませんか。

こんな小さな涙の中に、大きなお月さまがうかんでいるのです。

池の水にうつった お月さまのように。

ビヨン吉は、空を見上げました。

森の上にのぼったお月さまが、うつっているのかとおもったのです。

でも、まだどこにも、お月さまは出ていません。

では、いったい、ビヨン吉の涙にうつったのは、どこのお月さまだったのでしょうか。

それは、一年まえの秋の夕ぐれでした。

カキや、クリの実を、たくさんひろったビヨン吉と、ビヨン吉のおとうさんは、おかあさんのまっている家へ、山の道をいそいでいきました。

「こんなに、いっぱいの、ごちそうを持ってかえったらおかあさんは、きっとよろこぶだろうね。」

ビヨン吉が、たのしそくに、いったときです。

ズドーン！

という鉄砲の音といっしょに、おとうさんがビヨン吉の上に、かぶさりました。

いつとき、なにがおきたのか、わからなかったビヨン吉が、やっと立ちあがると、おとうさんはたおれたままです。

もう口をひらく力もないおとうさんでしたが、目だけはしっかりとあけて、ビョン吉を見えています。

「おとうさん！　しっかりして！」

いっしょうけんめいに呼びながら、見たのが、おとうさんの目の中に、浮んでいるお月さま。

ちょうど、そのとき、森の上には、まんまるお月さまが、のぼりました。

お月さまの光を、やさしく目の中に浮べたおとうさんは、ビョン吉をみつめながら、しずかに目を、とじました。

そばで、野ギクが、ゆれています。

そうだったのです。

ビョン吉の涙の中に、うつったのは、あのとき、おとうさんの目に浮んだお月さまだったのです。

大きく、明るい、おとうさんのお月さまをやっと見る
ことができました。

森の上のお月さまは、まだ出ていませんが、おとうさんのお月さまは、ビョン吉のまわりを明るくてらしています。

木の葉は、ふわふわと、あたたかいふとんです。コスモスや、ハギの花は、ビカビカとシャンデリヤです。

と、そのとき、どこからか、よぶ声。

耳をすましてみると、地面の下の方から、

「たすけてー。だれかきてー。」

あれは、たしかモン太と、ゴロベエの声です。

声のする方へ、ススキをかきわけて行くとこんどは、ツノ助の、なげない声。

「だれかー、穴へおこちゃっよー。」

「エーン、エーン。」

泣いてばかりいるのは、チイコとメイコのようにです。

みんながおちている穴をみつけたビョン吉は、声を出そうとして、ふとおもいました。みんなは、くぼくが、かくれんぼの鬼になると、いつも笑ってよるこぶんだ。こんなときに、ざまあみろっていつて、助けてあげるのやめようかな。

しかし、いつのまにか、おとうさんのお月さまが、大声でいいました。

「いま助けてあげるからねー。」

穴の中は、まっくらで、なんにも見えません。ビョン

吉は、そばにあった山いものつるを、するするとおろします。

おちそうになるビョン吉を、おさえてくれているのはおとうさんのお月さま。

穴の中ではモン太やゴロベエまでが、目に涙をためています。

いっぱい涙をためて泣いていた、りすのチイコが、声のした上のほうを見あげたときです。涙の中に、なにか見えます。

「あら、お月さまだわ。」

そういわれて、みんなも上を見あげました。

「ほんとだ、お月さまがみえる。」

と、しかのツノ助がいますと、ひつじのメイコもいます。

「ほんと、明るい、まんまるお月さまだわ。」

「やあ、お月さまといっしょに、なにかおりてくるぞ。」

くまのゴロベエがいうと、さるのモン太も、

「山いもの、つなだ。あれにつかまっただのぼれば、みんな、たすかるぞ。」

いままでは、だれの顔かも、わからなかった穴の中が

いちどに明るくなりました。

「わあーい、お月さまが、たすけにきてくれたんだあ。」
きゆうに、元気のでた、みんなの目の中に、うれしいまんまるお月さまが、うつっています。

ビョン吉のおかげで、ぶじに穴から、ぬけだすことのできたみんなは、野ギクの花の中を、とびはねながらうたいます。

まんまるお月さまをみたよ

小さい涙の中に うつつたよ

大きな あかるいお月さま

そのとき、森の上に、ぼっかりとまんまるいお月さまが、のぼりました。

さつき、ビョン吉や、モン太たちが見たのとおなじお月さまです。

それは、いつでも、どこでも、だれでもが見ることのできる、あのお月さま。

目をつぶっても。

(おわり)

シルクロードの旅

砂漠の風物と敦煌——「莫高窟」管見——Ⅷ

やまの い かん しゅう
山野井 貫 琇

(長野市常然寺住職)

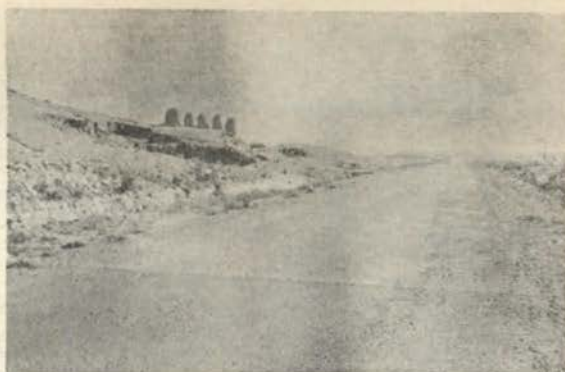
十月八日(水)それは今回の旅に出て六日目である。蘭州空港を朝八時に舞い上がった中華民航機は約五十人乗りの小型ながら、乗客はわが団員一行十七名と数人の中国人だけで閑散たるものであった。機窓にアラシャン砂漠を眺めながら、いつしか武威も張掖も越して二時間の

後には酒泉空港に着陸した。幸いに今日も晴天であるが、外吹く風は膚寒く感ぜられた。用便を済ますと旅行社差し回しのマイクロボスは直ちに出発した。いよいよ河西回廊の真只中を突走るわけである。ゴビ砂漠の西南端に消えていく、幅十メートル程の簡易舗装のこの道路

は、甘肅省と新疆とを結ぶ甘新公路である。しばらくはボブラの並木、道の右には煙突の林立する重工業の工場など見えたが、車は次第に砂礫の原へと進んでいく。まもなく右手丘の上に黄砂の大きな城が見えてくる。

嘉峪関である。当城は山嶽重々たる山城と違って、砂漠の丘の上に築かれた平城である。これは万里の長城西端の重鎮をなし、明の洪武五年、今から六百余年の昔に建てられている。四世紀の求法僧法顕が「上に飛ぶ鳥なく地に走獸なし」というゴビタン真只中の要地であったのだ。明代には漢民族の防人たちが常時四百人も待機し

ていたという。今回の旅行では初めて見た長城の一部、
 帰路には立ち寄って心ゆくまで見学したが、往路の今日は
 五分程道路に車を停めて遠望しただけであった。車はい
 いよいよゴビタンの中へと八十キロのスピードで走りに



— 甘新公路 —



— 嘉峪関 —

走る。烽火台は時折り現れてわれわれの目を楽しませて
 くれる。左手には美しい祁連山脈が手にとるようどここ
 までも続いている。出発前書物で読んだ酒泉鐘樓の四方
 の額に「東迎華嶽・南望祁連・西達伊吾・北通沙漠」

と。今それを思い出しながら、本当だ、本当
 だと、中国人の文筆の巧みさに一人感心して
 もみた。この街道を旅した昔人こそ私以上に
 深い思いを味わったことであろう。そんな感
 慨に耽っている時、蘭州から同行した蘭州大
 学日本語科の十八歳だという梁ガイド君が、
 「はれ幻の湖が見えますよ」という。

鹽氣楼である。窓の右手遙か砂漠の地平線
 上かすかに幻の湖が横に長く見える。車の進
 行と共に次第にはっきりしてくる。昔の旅人
 は渴いた喉を潤さんと、最後の力をふりしぼ
 ってその湖を目指したが、いつの間にか消え
 て疲労のために倒れていったという。中国で
 は一名「逃水」ともいうそうだが、横に長い
 長い逃水も車の走りと共に失せ、また次の逃
 水が現れてくるのであった。帰路には数百

メートル先に大きな湖、そして向うに更に砂漠と祁連山脈の見える美しい蜃気楼に出会っている。

やがて一つの部落に入った。玉門鎮である。十二時二十分玉門鎮第二招待所の看板が目に入っている。ボブラの参道、煉瓦塼の中に入ると幾つもの煉瓦造り平屋建ての長い家があった。何となく兵營を思い浮かべた。表には解放軍のトラック、庭には丸腰の民兵さんが三三五五のんびりと歩いている。写真撮影を所望したところ、三人の民兵さんは喜んで応じてくれた。あるいは解放軍の屯所にもなる所かと、そんなことを想像してもみた。ここで予定の昼食である。渴いた喉ではあったが、吸い込んだ



一烽火台一

ジュースは本当をいえば余り美味ではなかった。この辺地においても結構な馳走はあった。食後初めて食卓に出たメロン、吉住随行女はそれは白蘭瓜（びやくらんか）というものが、余り食べると腹に障るという。一同は遠慮をして手を出すのを渋った。隣の



一玉門鎮第二招待所入口一

食卓では、運転手や二人のガイドは本当にうまさうさに食べている。私もものは試しと一切れの半分を美味したが、これはよ瓜州（安西）も近くなった感がある。中国では昼休みは普通二時間という。私たちの出発は十四時であった。再び八十キロのスピードで走る。約一時間の後、

車は道から左に折れて砂中を三百メートル程入った。

今着いたこの古い土の城趾は橋湾城だという。この城は今から二百五十年程前、清朝乾隆帝が夢に名城を見、部下大臣に建設を命じたが城壁だけで中絶し放置され、名実共に幻の城となったという。東西三百メートル程の城壁だけのこの城は、今日も吹く風に砂が寄せられて、今にも朽ちかけようとしていた。そんな中で私たちは、瓦の破片や古銭を探すのに、我れを忘れて三十分程過した。やがて幹線に戻った車はひた走りに走る。今、目の前の両側に現れてきたのは、風蝕によってできた奇妙な土壌群である。

ガイドは「老風口」という。書物によれば風蝕土とも風化土堆ともいっている。嘉峪関を西に出ると関外の三絶というものがある。それは吐魯番の熱さ、哈密の寒さ、そしてここ安西の風である。今日は幸い余り風はないが、世界でも最強風地帯ということだ。その風に砂が吹き飛ばされて黄褐色の、高さ二、三メートルから十メートルくらい巨大な土塊、岩盤が林立している。無数に、無雑作に立つこの老風口は、烽火台にも、神にも、人にも、仏塔にも、怪獣にも似て、娑婆世界のあらゆる

姿を表しているかに見える。自然の成せる偉大な芸術作品、こんな光景が二十キロ近くも展開したであろう。地図でみる限り安西近くの布隆吉の辺りである。その昔もこのような光景があったであろうか。漢民族と北方遊牧民族が戦闘を繰り広げたならば、掩蔽堆として絵に見るような光景であつたらうと想像をしてみる。

本日のバスの道程は概ね三百三十キロ。旅人の目を楽しませてくれたものがなおある。驢馬・駱駝・羊・牛などの放牧に時折り出合った。道いっぱいに広がった羊の群は、車のクラクションに周章して道の両側の砂原に逃散する。この他愛もない後ろ姿に一人はくそ笑んでもいた。車の最先端に腰掛けていた私は八十キロのスピードで走る車のバウンドで再三ならず、頭を天井に当てた。運転手は親切に右上の取っ手につかまるよう助言してくれた。最先端は眺めもよかった。なおこの果てない荒涼たる砂漠にゆけども点々と生えている半円形の色あせた草が最初から目に入っていた。梁ガイド君は駱駝草という。正しくは蘇蘇草といって薬用にもなるという。駱駝は喜んで食べ、広い砂漠の中に行動しても、この草の続く限り長期の旅に耐えられるのだと説明してくれた。

後日鳴砂山行の際、足元に生えていたこの草に触ってみたが、トゲがあつてわれわれには真に厄介な植物にしか思えなかった。

今朝酒泉を發つてから既に三百キロ以上は走ったと思

われるが、車窓から離れないものがもう一つある。それは電柱。左側の柱列は途中祁連山きれんの谷間に消えていったが、右側のそれは道と並行して未だ離れない。自然の成せる業には人力の及ばないものが限りなくある。今、右



— 橋湾城入口 —



— 橋湾城址に昔物を探す —



— 老風口 —

側の柱列こそ止めどなく続いている。この人為の業は何処まで行ったら果てるのか。神業としか考えられない。大自然の中における人為に、改めて敬意を表してみたのである。



—ゴビタンのらくだ、向うは祁連山脈—



—安西県革命委員会招待所入口—

このような光景を満喫し、つまらぬことに感嘆している間に、十六時二十分、安西県革命委員会招待所に到着した。ここも煉瓦造りの平屋建てであり、未だ建築中のところも多く、さすが僻地の宿舎とは思えない。部屋

は土間、ベッドは堅く、しかも電気は暗い。風呂はなく、シャワーは制限時間もある。加えてトイレは屋外百メートルくらい離れて足元も危ない。砂埃りは飛び散ってうすら寒い。旅中の最低の宿泊所であったが、出発前の予報によって覚悟はしていた。昔日の旅人が幾たびか野宿をし、命をかけて往還したことを考えれば、今宵の宿は幸せの限りでもあった。

◆◆◆ “浄土句集”欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◆◆◆

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、“浄土句集”欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この“浄土句集”欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しく願います。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

浄土句集

一田牛畝選

評

大本山善導寺の開山忌には鎮西国師の御像の御輿が花の参道を肅々と練られるのである。その御輿の下をくぐれば願事が叶えられると言うので賑やかである。

衆僧を率ひ施餓鬼の緋衣導師
東京 新井 新生

評 苔の手入れはこまごまと大変である。苔の間にある草はなかなか取りにくい。箸に挟んでそれを取っている。若い者には根気が続かぬが、掃除第一の老僧だ。

石階を埋む人波藤の寺

福岡 原 敬二郎

評 緋衣は最高の僧階の人に許可されるのである。この大和尚が施餓鬼の衆僧の導師である。施餓鬼衆は手を合せて先立ちし親類縁者の供養をし、法悦の涙を流しつつ大導師を拜んでいるのである。

評 浄土宗二祖鎮西国師の誕生寺は藤の名所として有名である。人波が石階に溢れ本堂には祖師像が開帳され、安産祈願の人々で雑踏しているのである。

よき子等の練成本山声涼し
福岡 高良 慈風

三重 山田 うた

評 毎年夏休み中に総本山知恩院にて全国の子供の練成道場が開かれているが、それに参加出来ぬものの為に九州では大本山善導寺にて開かれている、手を合せて大きな声での念仏は無邪気で涼しく流れて来る。

東京 真野 竜

七夕や願を結ぶ笹に風

評 子供達は、七夕の竹を軒先に建てている。その笹にはそれぞれの願を書いて結んでいる。その短冊は風にゆれている。

結びたての髪をかがけて宵宮へ

東京 吉原登起子

盆栽に高原の花文字掲章

て来る。

東京 田中 秀代

御僧の箸もて手入苔の花

東京 小笠原香祥

肅々と花の参道祖師の輿

福岡 前田 秀峰

夏草や番ひの蝶のもつれ合ひ

東京 田中 秀代

薔薇園は昔兵舎の夢の跡
東京 末常てる子

花石榴独りの部屋の独り言
東京 真野よし子

蟬時雨施蛾鬼念仏高らかに
佐賀 金ヶ江満次郎

書き了えて夏風入れる写経の座
山口 三井 寛静

カナダより吾娘^{わがこ}帰る来る梅雨晴間
東京 栗原やえ子

庭若葉起居静かに茶の稽古
大分 丹羽 難中

朝顔に昨夜の悪夢忘れけり
福岡 上滝津弥音

振り草いくさ敗れし丘に咲く
東京 猪瀬 幸子

化野に赤き三ヶ月梅雨晴るる
京都 安藤 寛

お浄土の絵巻も斯くや睡蓮に
東京 吉田ゆきゑ

生き甲斐のありて六十路や若葉風
東京 鈴木 葉子

春の風邪しつこし根の続かざる
福岡 荒牧 還愚

立話とぎれしひまを秋の鯉
群馬 島津 か寿

紫陽花の一つ濃くなり梅雨に入る
東京 満尾衣有子

征西の宮御手植の藤今に
福岡 権藤みきを

よだれかけとりかへられし地蔵盆
山口 上野 明達

紫陽花の見頃の中を列をなし
三重 森 静枝

水仙の一株残り咲いてをり
福岡 永江 隆説

不信心の我に慈眼の微仏
福岡 荒牧 亀齡

風やみし花火のあとを掃きにけり
東京 松壽 敏江

吾のみにとどめおきたき春の風邪
福岡 国友 星畝

病む友の窓に見あぐる夏の雲
福岡 高良 幸代

夏菊の供華をしてある無縁墓
福岡 深井 鉦士

天寿仏続きめでたき十夜風誦
一田 一畝

表紙のことば

「秋」

大西耕三

暑い暑いと思っている中に、はや肌寒さを覚える程の朝夕のこの頃、夏の名残りの日除けのよしず、それに涼し気な心良い音色を夏の間中楽しませてくれた風鈴、もう少し働かせて下さいといったげな気持を察して、片付けなければならぬと思ひながらも、その名残りを惜しむ。

十月を「かななづき」ともいう。

「かななづき」については諸々の説があるが、「十月には天下の神々が総て出雲に集っ

てしまい、国内に神無しの状態になるところからこの日を神無月という」説、また賀茂真淵は八月、九月に多かった雷鳴もこの頃にはなくなるので、雷無月（かみなづき）だと説く。貝原益軒は陽無月（かみなづき）だとの説を出している。これは八卦の十月の卦が純然たる陰の月であるから、陽無月であるというのである。陽を「かみ」と読むのは神は陽の霊だからだという。その他にも説があるが、こうなつては浅学の筆者ではいずれを是とすべき

かわからない。筆者は唯十月の異名は神無月と覚えていただけである。

十月十日は体育の日、また各地で種々の催物、体育祭が催されるであろうが、近頃は体育の原点を忘れて、ただお祭騒ぎに走る傾向が強い。

すでに夏の暑い盛りに行われた全国高校野球にしても然り、少年達は純粹な気持でプレーにだけ没頭しているであろうが、それを

取巻く環境が、ことさらお祭騒ぎをし、選手達をスター扱いにしてしまう。これら総て若い人達を指導しなければならぬ大人達が、少年達のことよりも、自分達の榮譽心、欲望、メンツに拘るから起る現象であろう。嘆かわしい限りだ、とはいえ健康保持のためにも運動は必要であるから、無理のない程度の運動を毎日続けたいものだと思いつつも、未だ実行に移せないでいる筆者である。

◎『浄土』表紙版画販売についての案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八二―八七

法然上人の仏教観



津^つ村^{むら}諦^{たい}堂^{どう}

(秋田県角館町報身寺住職)

(一)

そこで法然上人は、

「日頃学んだ智慧は往生の為には何の用にも立たず」

として一切を捨て、善導大師の観経疏の文、

一心専念弥陀名号行住座臥不問時節久近 念々不捨者
是名正定之業仏願故

法然上人は若くして仏門に入り、熱烈な求道心と卓越せる智能を以て仏道達成に邁進せられたのですが、在山僅か三年にして比叡山を去って隠遁し、黒谷の叡空上人の門に於て浄土教の修学にはげんだのであります。ところが、ここでも意を得ずとして黒谷を去り、各宗学匠の許を訪ねて求むる仏教の本質を問い続けましたが、遂にそれからも心を打つ教説を得ることが出来ませんでした。

の文によって始めて永年求め続けた仏教の本義即ち法然

上人の心を充す仏教に到達し、四十三歳の年、他の諸宗とは全く異なる新しい仏陀の教説の展開樹立を完成され、浄土宗を創唱されたのであります。

(二)

然らば法然上人が求め続けた仏の教えとは、法然上人の人間としての苦悩の救われる仏教とは、どのようなものであったでありましょうか。

法然上人が年十五歳にして叡山に登り仏門に生涯を捧げようとした動機については、其説必ずしも一致していません。ないようであります。

父の遺言を履行する為

母の希望のすすめの為

叔父観学のすすめの為

法然自身宗教的天才であった為

など色々あるようであります。

然し法然上人出家の動機は何れにあるとしても、法然上人の心の叫びは人間苦の救済としての仏陀の教えを求

める為ではなかったでしょうか。

「学業にはげみ最後には天台座主になるように」

と常にその師皇円から云われていたが、在山僅か三年にして延暦寺を去り、西塔黒谷叡空上人の門に隠遁しているのであります。

この事から法然上人出家の動機は前述の父母叔父のすすめによって仏門に入ったとしても、求むる真の仏の教えは一般僧侶のそれとは異っていたことが理解されます。

身の榮達を願ひ、天台座主の輝かしい地位を目指してのことではなかったことは明らかなことであります。

(三)

当時念仏聖とか上人とか呼ばれた隠遁者は非常に多かつたようです。そしてそれらの隠遁者の隠遁の動機は、

「かつてはその位も努力と学徳によってかち得た僧侶としての最高位たる天台座主は、この時代に於ては殆

んど摂関家出身の貴族に独占され貴族以外の出身僧は全くその道を閉ざされていた。独り座主だけでなく高級僧官も事情を等しくするものであった。従って一般僧の中にはこのことへの不満から隠遁者の群に身を投じた人々。又天台座主は上層貴族の名門利養の手段となり、座主をめぐって骨肉相喰むの闘争が絶えず、一般衆僧に於ては僧位僧官の虚栄を競い、志を得ないものは徒党を組んで暴挙に出るといふ教界の墮落と腐敗に見切りをつけて真実の仏法探究に踏切った所謂出家の出家者達。更に自己の生活が僧侶としてのそれに適しないことを覺つて叡山を去った人々」

などその動機は又色々であつたようであります。然し法然上人の隠遁の動機はこれらとは全くその意義を異にしているのであります。

即ちそれは華やかな僧位僧官の栄達の達せられざるを嘆き、或は自ら破戒無戒に陥つて僧侶としての資格なきを悟つての結果ではなく、幼にして体験した人間的苦惱、即ち父の横死、母との生別、一族離散、かてて加えて仇敵明石定明の追求の危機、それらに伴う人間として

の怨情、悲痛、煩悶と云うギリギリの不安、苦惱、絶望の限界状況を、源頼朝、義経の如く、或は曾我兄弟の如く世俗的仇討という手段に於て解決しようとせず、死に臨んで残した父時国の酬怨為徳の遺言の遵守履行というひたむきな若き法然上人の至情に対して、前述の如き腐り切った当時の仏教界、特に叡山の仏教は全く相入れられざるものであったからだと思われれます。

法然上人はその人間苦の超克を叡山に求めたが、それは遂に不可能なるを悟つて、これを否定して隠遁生活に入り、他にこれを求めたものと考えられます。

(四)

斯くして法然上人は、自己及び人々の人間苦と社会不安と危機を人間の外に於てでなく一人一人の深い心の奥に於てその解決法を説く唐僧善導大師によって与えられ、その覚りを組織体系化して新宗派浄土宗を創唱されたのであります。そしてそれは当時の天台真言の呪術性と源信らの空想性に対して否定的立場に立つものであります。

批判的精神を以て聖道門仏教の非仏教性と密教的呪術

性及び非現実性を否定して実存主義的立場から仏教の眞義を掴み取ったのであります。その結果貴族独占によって変貌してしまった仏教を、その本来の姿に引き戻し、人間苦悩克服の正業として易行浄土門の専修念仏を樹立されたのであります。

法然上人は人間の能力の限界を意識し、超越的根源としての弥陀の本願力を信じ、複雑なその現実に対処する実践の主体性を守り抜くことが眞の仏教の教えであるという確信に立っておられたように思われます。

かかる確信は先述したように、法然上人自身の人間的苦悩から生れたものと思われませんが、更に法然上人をしてこの確信を強固ならしめたものは、当時の深刻な危機状況下に悩み抜いていた日本人全体が救われるべき新しい仏教への期待であったと思います。

(五)

当時漸く聖道門仏教はその無力を露呈して無力化しつつあったし、源信、良忍等の現実否定と未来往生の厭離穢土、欣求浄土の教説もそれが具備する空想性の為に必ずしも決定的な救済とはなり得なかった時、法然上人の

専修念仏はかかる時代の要望に応えるものとして出現したものと見られます。

法然上人が三十年をかけて修学し続けた仏教を一切捨て去ったということは、法然上人の持つ仏教観が既成仏教諸派とは全く異っていたからであります。

然らば法然上人が心の中に抱いていた仏教とはどのようなものであったのでしょうか。

私はそれを次のように考えるものであります。法然上人は仏教を、

一、仏教は人間苦解脱の教えである。

先老病死の解脱

一、万人に平等に妥当する教えである。

一切衆生悉有仏性

一、主体性を人間に置く教えである。

人間の立場からの信楽発願廻向

一、その行は万人可能の教えである。

易行道

一、魔術性の無い教えである。

人間の覚り

と考えておられたと推察されます。

従つて当時の仏教は決して法然上人の心を満すものではなかったのであります。

鈴木大拙氏は、

「弥陀を魔術師と思わせる如き考えは斯かる意味からすれば弥陀の真意に合わないもののように考えられる」

と云つておられます。

法然上人は弥陀を魔術師と考えることを徹底的に否定し人々をして我れにも仏性のあることを自覚させ、弥陀の実体験たる念仏往生の確實性を信じさせ、念仏にはげむことによって弥陀の本願に出逢い、往生を得ることが出来ると説いておられます。つまり人間の得往生の道は弥陀の本願を信じ、自主的に念仏行にはげむことによって得られる、云い換えれば衆生の得往生は個人の主体性に在ると主張されているものと考えられます。

法然上人はこのことを次の如く云つておられます。

「本願の念仏にはひとりだちさせて、すけをささぬなり。すけといふは智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただむまれつきのままにて念仏する人を念仏にすけささぬとはいふなり。さりながら悪をあらため悪人となりて念仏せん人は仏の御心に叶ふべし。かなわぬ物ゆへにとあらんかからんと思ひて決定心おこらぬ人は往生不定の人なるべし」

と、即ち智慧、持戒、道心、慈悲などは往生の爲には第二義的なものであり、根本となるものは善導大師の専修念仏なのであります。

法然上人が出家当初から求め続けた仏教は、善導大師の観経疏によつて人間の苦惱超克の教えとして、専修念仏即ち浄土宗として結実したのであります。

以上法然上人の浄土宗開宗の根柢を極めて独断的に述べて見ました。大方の御叱正と御批判をお願い致します。



念佛ひじり三國志

(全九)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

八兵衛方の下人でマロウと呼ばれる男が語る水無瀬離宮での拷問ぶりは残忍きわまりないものだったという。

殴る蹴るは日常茶飯で、火責め水責めでいたぶられたというのである。

「火責め、水責めか」

「さようで。柴を燃やした炎の上へ頭ごとおさえつけるんです。熱いこと、煙りにむせて息もできません。また両手足を縛って口や鼻から水を流しこみますだ」

「それで、お前らに何を言わせようとするのだ」

住蓮は息を詰めて告白を聞きながら、権力者たちの意図を探ぐりあてようとした。罪もない下人どもを痛めつける目的はいったい何であるのか。

「みそかごとの泥を吐かせようとしませうだよ」

「みそかごとの泥……」

「そちらのお上人さまなら、よくご存知でござえましよう。観音堂のお念仏にはいつも近在のカカ（女房）や娘が混じってきますだね」

と、マロウは空阿弥陀仏の方へ視線を移した。

「うむ」

「念仏に名をかりて、じつはカカや娘と戯れておるんじやろ。不屈きな奴ら、さあ泥を吐け。まことしやかに念仏の有難さを説くお上人さまらも、ねらいはカカや娘どもの身体。その名を明かせ、どこの誰なんじや、と責めたてるんでござえます」

マロウはふくれっ面で水無瀬離宮のやり口を非難した。

たしかに観音堂の別時念仏会は、僧俗男女が一体となつて念仏に励みこそすれ風俗の乱れなぞ全くなかった。その点、農村は純朴であった。

「御所のなかととは違うわい」

空阿弥陀仏は吐き棄てるように言った。下人のマロウも同調して、

「さようでござえます。御所では京の辻から得度も知れねえ白拍子を拾つてきて乱痴氣騒ぎ……」

後鳥羽院の悪趣味である。

いや、芸術に親しむ一人の男性として後鳥羽院像を撫でまわしたとき、悪趣味ときめつけるのは誹謗である。しかし彼は帝王であり、権力者であった。

現在に残る歌からもその耽美な生活がしのばれる。

橋姫のかたしき衣さむしろに

待つ夜むなしき宇治の明けぼの

うかりける人の心の朝寝髪

なにいたづらに乱れそむけむ

橋姫は、橋のたもとに立つ辻姫——遊女のことだが、彼女たちを宇治や水無瀬の離宮へ連れてきて、朝寝髪の情感をしつぽりと楽しむのである。

これらの歌はいずれも建永元、二年、つまりこの時期に詠まれている。

「わしらはみな真剣に念仏を信仰している」

「そのとおりで、御所に捕らえられた仲間もみんなそれを言うのですが、役人どもは信じてくれません」

「役人と言うと……検非違使の武士どもかな」

住蓮が言葉をさしはさんだ。

「よくはわかりませんが、恐ろしく力の強い奴らばかりなので、多分そつでござえましよう」

「それにしてもいわれなき罪業をかぶせられて拷問を受けるとは気の毒な話じゃ。ひとつわしらで御所へ出かけ

＜後鳥羽院と白拍子＞



ていつて申し開きをしてやろうではないか」

住蓮は空阿弥陀仏をうながすように見た。

「うむ……」

何となく態度が煮え切らなかつた。

このあと住蓮は水無瀬離宮の内部の様子をくわしく訊きだした。下人には似合わず要領のいい調子でマロウはこれに答えている。

その晩、住蓮たちは八兵衛の本宅に泊めてもらった。

「さっきの男な、変だとは思わんか」

二人きりになると、空阿弥陀仏が言った。

「変とは？」

「御所で考問を受けたと言うが、顔のどこにも火責めなぞ受けた跡がない」

「と言うと……」

「御所のまわし者かもしれぬ。それと、あのマロウだけが帰ってきて、なぜ五郎丸たちは許されないのか」

さすがは平家武者上がりの空阿弥陀仏だった。六波羅の陰險な機略には充分通曉していた。

「まわし者だとすれば、ねらいは何であらうか」

「それを、ずっと考えてきたのじゃ。わからん」

「わからんか」

住蓮は笑いだした。あまりにも率直である。

「ひとつだけ言えることは、逆をねらっておるな」

「逆をねらうとは、どういうことだ」

「つまり御所の狩人たちは、観音堂に集る念仏衆のあいだで淫らな風儀があらう、と責め立てている。だがねらいは逆で、淫らな風儀をあばきたることではない」

「淫らなのは御所の内側にこそ、というわけか」

「淫らではないという申し開きを待っておる。まじめな念仏者の集りだということじゃ」

「申し開きを聞いてどうするつもりなのか」

「さよう。そこらがわからん。まじめな集りだとしたら、狩人たちに何の「得」があるんじやろうか。責め立てるいわれは全くない」

「ないはずだ」

「そこがわからん……むむ、眠とうなったぞ。こんな頭でいくら考えても詮ないわ。住蓮どの。先にやすませてもらうぞ」

そう言うとき空阿弥陀仏は、ごろりと壁の方へ向きをかえてしまった。じきにイビキが洩れてきた。

住蓮は、ややあきれてその黒い寝姿を眺めやった。このところ仲間との交渉を一切絶って山野を放浪しているという。図太い神経に変質しているのであらう。

隣人に眠りこまれると、眼が冴えてしまうものだ。住蓮は藁床の上で反転をくり返しながら戸外が白んでくるまで寝つかれなかった。あれこれと、自分たち念仏者が当面した現実を思いわずらってしまうのである。人間個人の救い、精神の安らぎを与えてくれる念仏に、なぜうるさく干渉してくるのだろうか。

体力に限界がきたにちがいない。戸外の白みが次第に朝の光りを呼びこんでくるなかで住蓮は深い眠りへ落ちこんだ。

二

翌朝おそく眼をさました住蓮が八兵衛宅での朝餉をすませると、空阿弥陀仏は裏山へ誘いだした。いきなり要求してきたのである。さんばらに伸びた髪をぜんぶ剃り落してくれという。

「また、ひじりの姿になるのか」

「そうしなければならんじゃろう」

「そうしなければ、とは？」

「今朝早く起き出てからな、あの辺りを歩きまわって考えた」

河床の彼方、水無瀬離宮を指さした。

「それで……」

「ひじり姿にもどることが最良の策だと思えてきた」

「最良の策か」

「唯一つの策かもしれん。先方はあの下人を使って罫を仕掛けてきた。五郎丸たちの潔白を証かすためには誰かひじりが御所へ出かけて申し開きをしてくる必要がある。狩人たちはそれを待っておるじゃろう。そして、何かを要求してくる」

「何を要求してくるのだろうか」

「さ、それが罫だ。罫の正体を知るためには、進んでそこへ落ちこんでみるしかない」

「わしもゆこう」

「いや、住蓮どのは此処で待っていて欲しい。二人そろって殺されることはない」

「狩人たちは殺したりするかな」

「それはわからん。ただこれだけは言える。二人がそろって御所へはいれば殺される。だが仲間が外で待っているれば殺すまい」

「証人がいるという意味か。でも、わしが外で待っていることを狩人たちはどこで知るのが」

「それはあの下人が告げるはずだ」

「なるほど。狩人の手先であればそれくらいのことではやるな。しかし、危険な目に遇うことは間違いない」

「覚悟の上だ。それと、いま一刻も猶予ならぬのは五郎丸たちを助け出すことだ。あの老人では身体が保つまい」

たしかに空阿弥陀仏が立てた方策には筋が通っている。最良かどうかはともかく、五郎丸ら村人の危難を救ってやれる唯一つの手段であろう。

「これで頼む」

と空阿弥陀仏は腰にさした山刀を抜き取った。剃髪の具に用いよ、と手渡してきた。

二人は流れを求めて林間をさまよった。じきに小さな流れを発見した。空阿弥陀仏は端座した。住蓮は手のひらで水を掬うと、その蓬髪を濡らした。

お互いが口ずさむ念仏。住蓮は軽やかに山刀を上下させた。いぎたない髪は落ちて清潔な頭肌が露出してきた。折からの強い日差しに輝いて、住蓮はたいへん尊いものに見えた。

空阿弥陀仏の心底も覗きこみたかった。

「再度、出家した気分はどうか」

「再度？ いや、こんどが初めての出家じゃ」

「ほほう。この前の出家は間違이었다と申すのか」

「そのとおり」

「お上人（法然）のみ教えも嘘だと申すのか」

「お上人さまのみ教えに、嘘も間違いない。虚仮（こ

け）はこの空阿にあった」

「なぜ？」

「わしはおのれ一身体だけが救われたいがために武士を捨てた。出家した。おのれ一身体だけを、とこだわっておるところ、すでに仏法を大きく踏み外している。おのれの救済なぞ一番あとまわしだ。まず他へ救いの手をさしのべるのが真の仏法。他人が救われることで、自分も救われる」

「うむ。それが大乘仏教だ」

「こんどの出家。わし自身には何の關係もない。わし一身のことだけを思ったら、いまのまま山男でいようが、ひじりに戻ろうが、どうでもいいことだ。昨日、わしの山男姿を見て住蓮どのと言ったな。逃げ出す気なのか、と」

「言った」

「御所の様子が異様なので、わしは還俗してそれを探ぐることにした。観音堂へ集ってくる念仏衆が御所へしょつ引かれていっても気にならなかった。わしはお上人の身だけを守るんだ、と自分に言いきかせておった。おぬしは軽い意味で口走ったのだから、仏法の本道に立てば、わしは明らかに逃げ出そうとしていたんだ。お上人さまの身さえ守れば、ほかの人間など、どうなってもかまわぬ。虫ケラみたいなのこの里の念仏衆と運命を共にしてはたまらぬ。空阿弥陀仏が、そんなところで野たれ死にをしたら、専修教団の損失だ、ぐらいのおごりたかぶりがあった。だが、いまは違うぞ。この出家は違うぞ。仏法の本道へ立ちかえっての出家なのだ」

「今朝から、そのことばかりを考えていたわけだ」

住蓮は、しげしげと僧形を取り戻した空阿弥陀仏の横

顔を眺めた。その輪廓には、昨日までの逞ましさに加えて、新しく目ざめた内面からのまばゆい光りでおおわれていた。

このひじりが生き永らえることが許されたら、必ずや師の法然を継ぐような大念仏者になるであろう、と住蓮は予感した。

住蓮のこの予感は正しかった。われわれは乏しい資料ながら法然没後の京の街で善男善女に念仏を説き続ける空阿弥陀仏の姿を垣間見ることができる。

歌人藤原定家はその日記「明月記」でその消息らしきものに時折ふれている。

建保五年（一二二七）三月二十九日。

近年、天下ニ空阿弥陀仏、念仏を称ウル事アリ。

件ノ僧、党類ヲ結び多ク壇ヲ集ム。天下ノ貴賤競

イテ結縁ス。殊ニ故宗通卿ノ後家、造ル所ノ堂ヲ

占メ（九条、世、大宮相国ノ堂ト称ス）ソノ道場トナ

ス。是レ隆信朝臣ノ娘、九条院生ムトコロノ尼公。

念仏宗ノ張本タル故ナリ

嘉禄元年（一二二五）四月二日。

去月下旬、入道相国中山ノ迎講ニオイテ、ワザワザ空阿弥陀仏ヲ請フ（勸勘、天王寺ニ在リ。コノ事ニ依リ推シテ入洛ト云々）事、密議ニアラス。総ジテ公卿座ニ列シ管絃ト云々

嘉禄元年五月四日。

近日伝エ聞ク。上人空阿弥陀仏（専修念仏ノ法師）山衆徒ノ訴訟ニ依リ、関ノ外ニ出サレオワンス。而モ入道相国ノ招請ニ依リテ入洛。中山ニオイテ迎講ヲ修シ、天王寺ヘ帰ルノ間、時ヲ煩イ給フノ由日来之ヲ聞ク。去ル月ノ下旬ヨリ一条高倉ノ辺リニ在リ。只今往生スルノ由、閭巷騒動ス。天下ノ貴賤尼女悉ク群集シ、面々各々珍膳ヲ捧ゲテ供養ス。ソノ物、皆風流ノ飾リ玉、結ビ花ヲ用イ、菓物、飯菜ヲ入ル。毎数之ヲ受ケ、之ヲ食ス。往生十余日ニ及ビ病漸ク減ニ付ク。供養意ラズト云々

いかに巷間の人気、評判が高かったかを実証する記述である。

ついでのことながら、嘉禄三年七月六日（一二二七）の「明月記」は次の消息を紹介している。

山門ノ訴エ強盛。神興ヲ振ルベキノ由、シキリニ以テ騒動スルノ間、今日雅親卿陣ニ参ズ。左大弁、結政ニ参ズ。張本隆寛（モト山ノ僧、律師）空阿弥陀仏、成寛（幸西）等流罪云々。……中略……善恵房上人（宇津宮随逐ノ師ナリ）山門訴訟。ソノ数ニ入ルノ由之ヲ聞ク。周章シテ誓状ヲ書キ、且ツ公家ニ進ム。妙香院又披キ陳ベ給フト云々。吉水ノ前大僧正帰依、臨終善知識トナス。之ヲ以テ証固トナスト云々

隆寛や空阿弥陀仏が流罪されたいわゆる嘉禄の法難だが、後半は善恵房証空にふれている。自分の名が山門衆徒の訴状に列なるのを知り、周章狼狽して奔走につとめたという。吉水の前大僧正慈円の帰依を受け、臨終の善知識をつとめた事実を反証の資料として提出したらしい。

善恵房証空の人格を云々する前に、彼が育った環境や

接した階層に思いを及ぼすべきであろう。証空は久我通親の猶子で、平安貴族の血液が濃厚に体内を流れていた。

薩摩へ流罪ときまった空阿弥陀仏。だが罪地へ到着する以前、すなわち翌安貞二年（一二二八）正月十五日に寂したとつたえられる。行年七十三歳であった。

「明月記」が紹介するこれらの記述は二十年もあとのことで、建永二年当時の空阿弥陀仏は血氣旺んで、未だ前身である武者の面影をとどめていたらしい。

明遍も同名の空阿弥陀仏を号したが、法然門下ではこの同名異人たちを「有智ノ空阿」と「無智ノ空阿」と呼び別けたという。もちろん「有智」は明遍であって、「無智」には無学というよりも行動、実践の念仏者というニュアンスが強かったはずである。

三

空阿弥陀仏は水無瀬離宮へ去った。

そこまで案内していったのは下人マロウであった。だがこの下人、再び住蓮が待つ八兵衛宅へ姿を現さなかつた。

た。あのまま離宮内へ吸収されてしまったのか。どこかへ逐電したのか。以後の消息を絶った。御所の諜者、という空阿弥陀仏の洞察は正確だったようだ。

住蓮はじりじりしながら空阿弥陀仏の帰りを待った。二日三日と八兵衛宅へ滞留した。

気が気ではないのである。吉水の禅室へも戻らねばならない。さりとて空阿弥陀仏をこのまま放置しておくわけにもいかない。何度かみずから水無瀬離宮へ乗りこんでみようかと思った。だがその都度、彼がのこしていった言葉がよみがえった。

——二人そろって殺されることはあるまい。

すでに盟友は殺害されてしまったのであろうか。

明日一日だけ待ってみて、とタイムリミットをもうけた四日目の夜、眠りかけた住蓮は八兵衛の声に起こされた。

「お上人さま、五郎丸どんが帰ってまいった様子ですぞ」

「何っ五郎丸が」

住蓮はハネ起きた。

ついに水無瀬離宮から待ちに待った反応があったの

だ。ただし長老五郎丸の釈放はきわめて隠密らしく、未だ里人は誰も知らなかった。それとなく留守宅に気をくばっていた八兵衛が察知しただけなのである。

住蓮は身仕度ももどかしく五郎丸宅へ出かけていった。

かたく閉ざされた板部を八兵衛が小突いた。内から女の声がした。嫁らしい。

「東山のお上人さまが長老どんに会いに来なすった」

「爺さまは、たいへん疲れています。明日にしてみらえませんか」

変によそよそしい。住蓮は八兵衛を押しつけて板部に口を付けた。

「是非、今夜会っておきたい。いや、ここで話をするだけでもいい」

「ぐったり寝こんでいます」

「すこしだけ起こしてもらえないかな」

「それが……」

長い沈黙があった。

やがて、野ネズミが板をかじるような低い声で、

「裏へ、裏へまわって下さい」

とつぶやいた。

「裏だ」

住蓮は八兵衛をうながした。この家の裏手がどうなっているのか、住蓮には見当がつかないのだった。

裏戸がそとと引かれ、住蓮たちは室内へ上がりこむことができたが、五郎丸との面接は無にひとしかった。龕床に仰向いた老人は、顔をすっぽりと白布でおおわれている。白布の下は残忍な拷問の傷痕でずたずたになっているにちがいない。

眠ってはいなかった。だが何を訊いても返事はない。聞こえている証固に首を振ったりうなずいたりして返事だけはする。口中を傷つけられて言葉がつづれないのである。

「空阿弥陀仏、観音堂のあのひじりに会ったか」

「……」

老人はうなずいた。

「何かことづけは？」

「……」

首は横に振られた。

水無瀬離宮の獄内で顔は合わせたが周囲の監視がきび

しく言葉なぞかわせなかったにちがいない。

拷問の内容を聞いただしてみた。反応は全くない。語りたいことが多量すぎて、首を動かすだけのシグナルではまかないきれぬのであろう。

「つまりおぬしは、あのひじりと交換だったんだな。ひじりが閉じこめられたことで、おぬしは許された」

この問いかけには明確な合意があった。

結局、住蓮は空阿弥陀仏と同じ水無瀬離宮内の獄へ押しこまれた事実を確認しただけにとどまった。

八兵衛ともども引きあげようとして、住蓮はふと老人の不自然な動作に眼をとめた。何やらしきりと住蓮をさし招くような仕草をする。

そつと八兵衛の耳もとでささやいた。

「ひと足にいつてくれ。わしはな、この爺さまの傷が早く回復するように祈つてやりたいから」

「へえ」

さらに若いこの家の嫁にも、

「浄めの塩と水を持ってきてくれないか」

と命じた。

薬床のまわりには住蓮だけになった。彼は老人の耳も

とへ口を寄せた。

「おい、みんないなくなったぞ。何かわしに言いたいことがあるのではないか」

「……」

相変らず声は発しなかったが、しきりに右手の指で顔面をおおうた白布を剥ぎ取ろうとする。

「そうか。これがあつてはしゃべりにくいかな」

手を貸した。だが、しゃべるために白布を剥いだのではなかった。

むき出された顔面、それは想像を遙かに越えるものだった。皮膚はいたるところで裂かれ、左眼はえぐり出されて空洞になっている。鼻孔はつぶれ、唇は日常の三倍にもふくれあがつていた。舌先を詰められでもしたのか、発声は不能だった。

五郎丸老人は、そんなおのれの顔なぞかえりみようともしないで、いま剥ぎ取った白布をまさぐっている。

さらし木綿を二枚かさねた白布だったが、そのかさねられた隙間の部分にもう一枚、絹の小片がはさみこんであった。それを引きずり出そうとする。

「これは？」

「……」

「そうか。空阿弥陀仏の袖片じゃな」

水無瀬離宮へ出かけるとき、空阿弥陀仏は山男の着衣を、ナマコ色の僧衣に着換えたのを思いうかべた。ひじりのころ愛用していたものだった。

その僧衣、袖の部分が引き千切られて五郎丸老人の傷包帯の間にしのばせてある。

「おお、これか」

住蓮はふるえる手で取り上げるとひろげた。袖片のナマコ地に黒い文字が書きつらねてあった。これもおそらく水無瀬行きの折に用意したものであろう。木炭の棒芯で書かれたものだった。

だが、読んでいる暇はなかった。足音が近づいたのである。

「こんなものでよろしゅうございましょうか」

若い妻女が腕に盛った塩と水を運んできた。

「結構じゃ。ひどい傷だ。これを浄めてな……」

と袖片をふところにしまいながら住蓮は白布の方で顔を拭いてやった。

水無瀬の獄中から空阿弥陀仏はどんな報告をもたらし

たのであろうか。

(つづく)

＝新刊＝

△幼児用▽ 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共二二ページ（カラー刷）

定価三〇〇円（送料実費）

法然上人お誕生八五〇年ご正当の年
を明年に控えて、そのお待ち受け法要
や慶讃法要の施本等には是非ご利用下
さい。

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十一―六

大 道 社

◎ 読者の皆様へのお願ひ —

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただけてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由

(生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)

一、枚数 四百字用紙五枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 十月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十六年九月二十五日 印刷

昭和五十六年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四番

〒103 振替東京八―八二―八七番

発展する浄土宗開教区

「法は人による」

正法弘宣はあなたによって、古来、法は独り弘まるものではなく、人によって弘まるといわれております。

開教使募集

資格 浄土宗教師資格取得者(見込み可)

赴任先 ハワイ、北米(ロスアンゼルス)、南米(ブラジル)
のうちの希望地



浄土宗南米別院本堂

詳細についての御照会は——

浄土宗開教振興協会事務局

〒605 京都市東山区林下町400

浄土宗宗務庁内

TEL 075(525)2200(代)